

静岡方言から見た信州方言

木 川 行 央

1. はじめに

静岡県は、東は神奈川県、西は愛知県、北は長野県と山梨県に接する東西に長い県である。昔の国名でいえば、東から伊豆（伊豆諸島を除く）・駿河・遠江の三国となる。現在でも県内は、東部・中部・西部と三つの地域に区分される。ただし、この三分は昔の国とは一致せず、東部は伊豆と駿河の東部、中部は駿河と遠江の東部を含む。いずれにせよ、静岡県は、行政的には東西で区画されてきたわけである。

地形としては、北は富士山及び赤石山脈がそびえ、南は太平洋に面している。おもな河川としては、東部を流れる富士川・狩野川、中部の安倍川・大井川、西部の天竜川がある。このうち、狩野川以外は、北の山岳部から南に流れる急流である。南北に流れる河川のうち、安倍川と大井川は静岡県内のみを流れているが、富士川は長野県と山梨県の県境が源流で山梨県から静岡県へ、天竜川は諏訪湖を源流とし、愛知県・静岡県を流れる。

幹線道路としては、東西を走る東海道があり、鉄道も東海道線が東西を走っている。これに対し南北を結ぶ道路には、甲州と結ぶ東の甲州往還（駿州往還）、信州と結ぶ西の秋葉街道などがあるが、静岡県中部の安倍川・大井川の上流は行き止まりで、中部から信州側に行く道はない。例えば大井川は下流域から上流域への道は険しいため、川沿いの南北の移動よりも、峠を越えて東西の隣接地域に行くことが多かった。しかし、静岡中部と信州の間に全く交流がなかったわけではない。大井川最上流の集落である井川には、諏訪神社があるが、これは長野県の諏訪大社から勧請されたものと言われている。実際、かつて話をうかがった話者の中には赤石岳を越えて長野県側へ行った経験があるという方もおられた。また、井川から安倍川の上流域へ行き、更に峠を越えて山梨県にまで行ったという話もうかがったことがある。このように、整備され

た道路がなくても、山を越えての移動はあったようである。しかし、それは、大きな人の流れというわけではない。

2. 信州方言・静岡方言の位置

日本の方言学の基礎を築き、方言によって地域を区画する方言区画論を提唱した東條操は、信州方言や静岡方言を含む東海東山方言について、次のように述べている。

この地方は東部方言と西部方言の緩衝地帯で、命令の口、打消のナイ、形容詞連用形のク、指定のダ、ハ行四段動詞の促音便の西の境界線がこの地方に集まっている事は既に述べた通りである。

東海東山方言は新潟の上越、中越地方、長野、山梨（郡内を除く）、静岡、岐阜、愛知を区域とする方言で、大体、長野、山梨、静岡の方言と岐阜、愛知の方言と新潟の方言とに分れる。南信の木曾谷、伊那谷の方言は岐阜、愛知に近い。隠れ里としては新潟の秋山、山梨の奈良田、静岡の大井川上流、岐阜の白川が言語の異風なので知られている。（東條 1954:46）

このように、東條 1954 は、東海東山方言を更に三つの区画に分けるが、静岡方言は信州方言・山梨方言とともに一つの区画をなしているとされる。この三県の方言を、都竹 1949 では「ナヤシ方言」と呼んでいる。

さて、東條は、東海東山方言に共通する特徴について以下のように述べている。

この地方には推量助動詞ズ、ズラ、ツラが広く行われている（新潟には稀である）。ズは行かず、行かズとして話者の意志を表わす。一見、打ち消しの形に似ているが、これは「行かんず」から出たものである。ズラは雨ズラ、行くズラ、高イズラとして推量を、ラは行くラ、高いラのようにやはり推量を表わすがこれは名詞にはつかない。（略）

ツラは過去の推量である。行ツツラ（行ツツラであろう：注木川）は行つたらうである。時に行ったズラも使われる。

禁止の言い方で長野の東北部に、ナナ行ツトのようなナナ……トの形が行われ、山梨にも、神奈川にも類似の形が散見する。

(略) そんなこと有ラスカの反語形式、行コマイ(カ)の勧誘形式、サ変動詞の下一段化「セル」などはこれ(名古屋市を中心とするオキヤーセ言葉:注木川)に比べると使用区域が広い。ズラは尾張ではダラという。ラは使わない。(下略)(東條 1954:46-47)

上記のうち、推量を表すラ・ズラ、意志を表すズは、特にナヤシ方言に広く分布する言葉である。これについては、後に述べる。また、禁止の言い方はナナ…トの形ではないが、関連すると思われる言い方が静岡の一部にも見られる。

ところで、東條は言語の異風な所として、長野県の秋山、山梨県の奈良田、静岡県の大井川上流、岐阜県の白川をあげているが、ナヤシ方言の三県にそれぞれある点が興味深い。この三地域の特徴を簡単に見ておきたい。

まず、長野県の秋山の方言では、「用事」と「楊枝」を発音の上で区別する。この二語はそれぞれ歴史的仮名遣では「用事」は「ようじ」、「楊枝」は「やうじ」と書く。かつては、この仮名の表記の通りヨウジ・ヤウジと発音し区別があったのが、その後、音が変化し、東京や関西など広い地域では、どちらも同じヨージという発音になってしまい、仮名表記も区別がなくなったわけである。この変化は単にこの二語だけではなく「オウ」と「アウ」を含むすべての語で起こったことである。しかし、一足飛びに現代の共通語のような同じ発音になったわけではなく、口の開きの狭い「オー」と口を広く開ける「オー」で区別する時期があったとされる。秋山では、この区別が今も残っているということである。ちなみに隣接する新潟県の中越などでも同じ発音が聞かれる。また、秋山では、「イ」と「エ」が混同し、「エ」となるが、これも新潟に連続する。文法の面では、万葉集の東歌や防人歌にみられる東国方言に通じる言い方がある。例えば、万葉時代の東国方言では五段活用動詞の終止形と連体形は形が異なり、終止形は「行く」のようにウ段、連体形は「行こ時」のようにオ段となるが、これと同じ言い方が秋山にある。同じく万葉集に見られる形容詞の連体形がツケとなるという表現も、秋山で見られる。

山梨県奈良田の方言では、これも昔の日本語では区別していた「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」の発音の区別がある。また、過去を表す「た」がトーとなる、打ち消しを表す「ない」がノーとなる(この形は、万葉集の東国方言に見られる打ち消しの形「なふ」との関連が考えられる)などの現象があり、アクセントも周辺地域のアクセント

と異なっているとされる。

静岡県大井川上流の方言としては、静岡市井川地区の方言が有名である。この地域の方言の特徴としては、まず、語ごとにアクセントが決まっていない（例えば「橋」「箸」「端」をアクセントで区別することがない）いわゆる無型アクセントであること（全国的には同じようなアクセントの地域はあるが、東海東山方言ではこの地域のみ）、「挟む」をバサムというなど語の最初に p 音がくることがあること（現代の共通語では、和語漢語で語の最初にパ行の音がくる語は、擬音語擬態語を除くとほとんどない）、打ち消しを表す形が奈良田と同様ノーであること、禁止の言い方に行ツツのようにツが用いられること（これは、上述のナナ…トと同様、古語の「な…そ」との関連が考えられる）、勧誘を表す表現に行かッのような促音で終わる言い方があること等がある。

以上三地域に見られる特徴として共通するのは、そのすべてではないが、日本語で古く用いられていた表現が残っている点である。

3. 静岡県内の地域差

中條修 1998 は、静岡県内を方言の点から四つの区画に分けている。

静岡県方言	}	東部方言	富士川以东と伊豆地方を併せた地域
		中部方言	富士川以西、大井川以东の地域（掛川市以东の東遠地方も含める）
		西部方言	大井川以西の遠州全域（東遠地方を除く）
		井川方言	大井川上流旧井川村と本川根の奥の一部を含めた地域

この区画は、井川すなわち大井川上流がその特異性で一つの区画となっている以外は、1. でみた静岡県内の三区画にほぼ一致するものであるが、もちろん偶然のものではない。東部方言は、隣接する神奈川県の言葉との関係が認められる。この神奈川県さらには東京との関係は、単に言葉だけではなく、人々の生活や意識においても同様に認められる。西部方言も同様であり、隣接する愛知県との関係が強い。

4. 東西方言の境界線としての信州と静岡

2. で引用した東条 1954 でも述べてあるように、東海東山方言は、東部方言と西

部方言の緩衝地帯であり、ことに信州は、東部方言と西部方言の境界線が多く走っている。

図1は1903（明治36）年に文部省国語調査委員会が実施した口語法の調査結果から、日本の東と西で異なる事象の境界線を示したものである。右から①「起きる」など一段動詞の命令形が「オキロ」（東）か「オキヨ」及びそれが変化したもの（西）か、④打ち消しの形が「シナイ」のようにナイとなる（東）か「セヌ・セン」のようにヌンとなる（西）か、③「広い」のような形容詞の連用形が「ヒロク」のまま（東）か、「ヒロー」や「ヒルー」などウ音便となる（西）か、⑤「これは本だ」の「だ」が「ダ」である（東）か、「ジャ」や「ヤ」である（西）か、②「払う」などワ行五段活用動詞が「て」や「た」につくとき、「ハラッタ」のように促音便になる（東）か、「ハロータ・ハルタ」のようにウ音便になる（西）かの境界線である。図2は、1957（昭和32）年から1964（昭和39）年にかけて調査された結果をまとめた『日本言語地図』の中から東西で対立のある語の境界線をまとめたもので、⑫酔の味が、スッパイ（東）

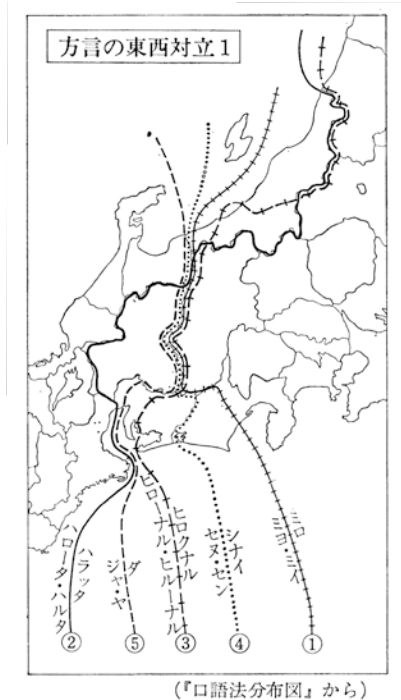


図1 東西対立の境界線 1

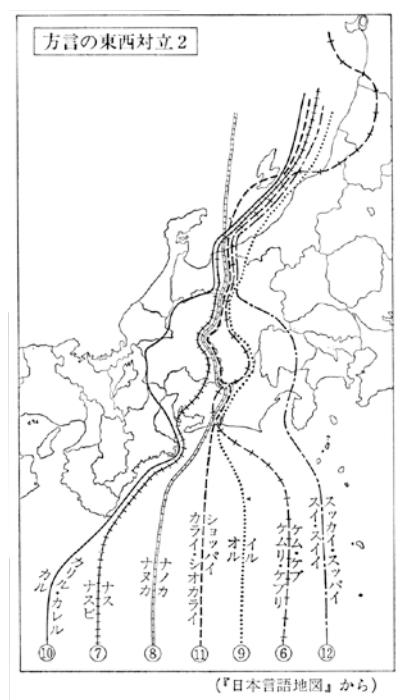


図2 東西対立の境界線 2

かスイ（西）か、⑥「煙」が、ケム・ケブ（東）か、ケムリ・ケブリ（西）か、⑨人がイル（東）か、オル（西）か、⑩塩の味が、ショッパイ（東）か、カライ・シオカライ（西）か、⑧「七日」がナノカ（東）か、ナヌカ（西）かの境界線である。

今、上にあげた境界線の多くが、新潟県と富山県、長野県と岐阜県の県境あたりを走っているが、その南はあまり境界線がまとまっていない。これは、長野県と岐阜県の県境付近には日本アルプスという障害があるのに対し、太平洋岸は特に大きな障害となるものがないことによるのであろう。上に述べたように、静岡県内には南北に流れる大きな川が4本あり、特に大井川は、「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」という有名な馬子歌もあるように、障害となっているのではないと思われるが、実際には言葉の境界にはほとんどなっていない。（図1・図2とも徳川1981による）

上にあげた事象のうち、打ち消しがナイであるか、ンであるかを、1979（昭和54）年から1982（昭和57）年にかけて調査された結果をまとめた『方言文法全国地図』で示す（図3）。これをみると、長野県内でも西部及び西南部はンが分布している。



図3 「起きない」（国立国語研究所
1991 『方言文法全国地図』第2集：部分）

更に静岡県内では中部にまでンが分布している。この図でははっきりとは分りにくい、大井川の東岸、静岡市内にもンが分布している。このように、長野県境と静岡県境がナイとンの境界線ではないが、両県がナイとンの境界地域であることは明らかである。さらに、上にも述べたノーが大井川上流と山梨県西部に分布していることも分かる。

もう一項目、「塩辛い」の図を見してみる（図4）。これも長野県南西部にカライが分布し、静岡県西部にもカライが見られるが、長野県と静岡県が境界となっていることが見て取れる（東京周辺にカライの分布が見られるが、これは共通語的なシオカライ

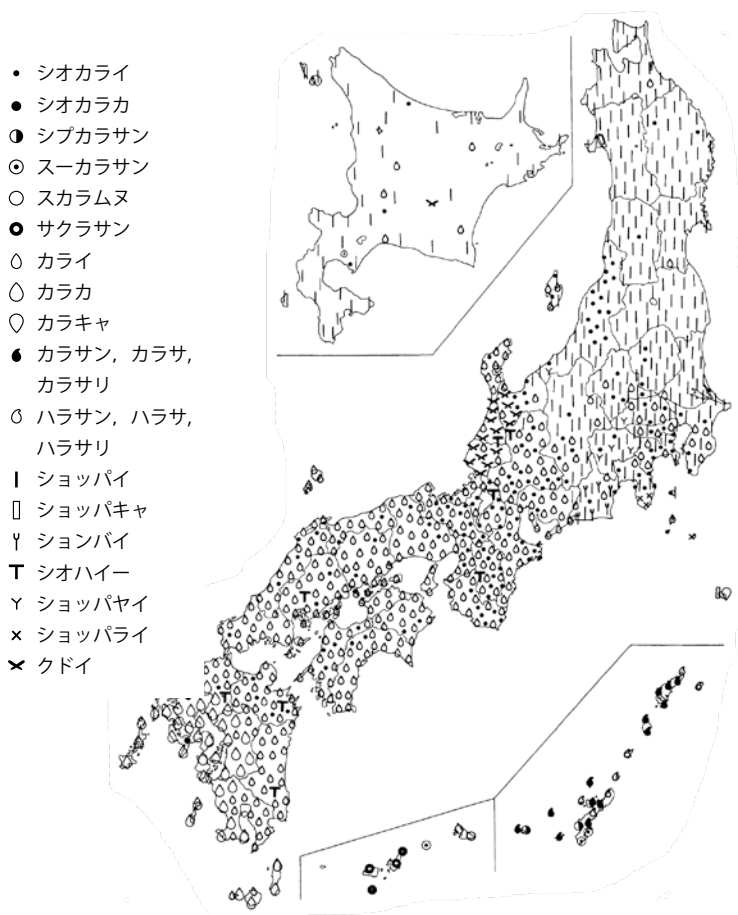


図4 「塩辛い」（図は、佐藤監修 2002 による）

の影響かと思われる)。ただし、長野県に分布するのがショッパイであるのに対し、静岡県の主として中部から西部にかけて分布しているのが、ショッパイと同系統ではあろうが、全国的に見ても他にはない、シオンバイである点が特徴的である。

5. ナヤシ方言としての信州方言と静岡方言

2. で、ナヤシ方言の特徴を見たが、そこで挙げられていた項目について確認しておこう。

まず、意志あるいは勧誘を表す形がズであるという点である。『方言文法全国地図』によると、関東地方以东はベーが用いられるが、山梨県東部・静岡県東部でも用いられている。静岡県内では富士川あたりからベーが用いられるようになると言われている。一方西の愛知県や岐阜県及び長野県南西部・静岡県西部では、東條も挙げていたマイや「行かない？」に当たる言い方が多く用いられている。その間の地域にズ及びザー・ダーが現れる。この形式は他には見られない形式であるが、『方言文法全国地図』の調査の段階では、ナヤシ方言の地域でも、さほど広い分布を示しているとは言い難い。

次に推量の言い方であるが、図5が「書くだろう」、図6が「静かだろう」である。

図5を見ると、静岡県・山梨県全体にラが分布し、一部神奈川県西部にも分布して

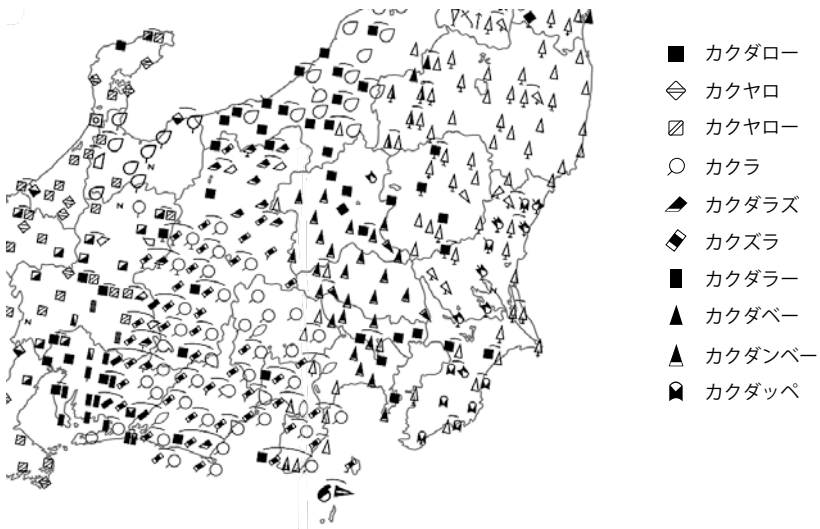


図5 「書くだろう」(国立国語研究所
1994『方言文法全国地図』第3集：部分)

いる。長野県においてもラが勢力を持っているが、東北部ではダラズの形になっている。ズラの回答も見られるが、数はラに比べて少ない。一方図6では、長野県・静岡県ともにラは現れず、ズラが主体となる。周辺地域は、東はダローないし勧誘・意志と同じベアーが、西は「だ」がヤとなる地域でヤローとなる。ここで、愛知県に見られるダラー（ダラ）が問題となるが、これについては後述する。ラとズラの違いは、図5と図6の違いが示すように、動詞（更に形容詞）にはラが、形容動詞（更に名詞）にはズラが用いられるというところにある。ただし、動詞でも共通語の「書くのだから」に当たる表現にはズラが用いられる（共通語の「書くの」の「の」はその前の部分を名詞にする働きをしている）。この使い分けもナヤシ方言内で共通すると言って良からう。

さらに、ここには示さないが、ナヤシ方言で話題にのぼることの多い、「走る」という意味でのトブもナヤシ方言の三県に共通して分布おり、更に栃木県北部から福島県東部にかけても分布している（『新日本言語地図』「走った」の項を参照）。

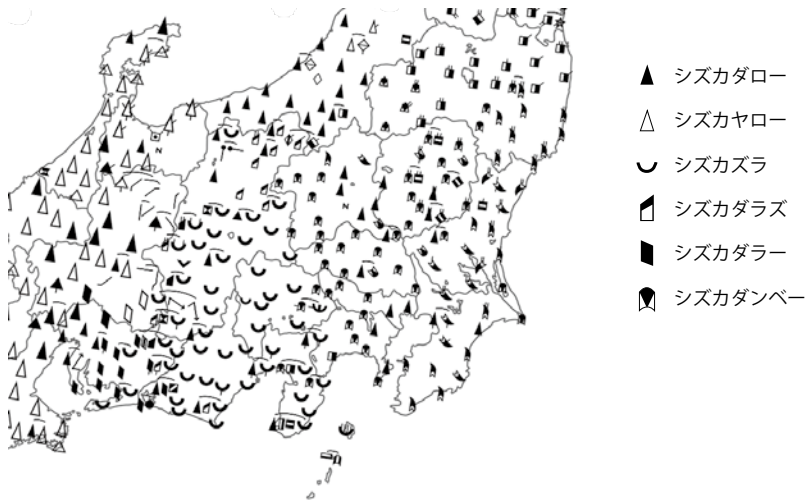


図6 「静かだらう」（国立国語研究所
1994『方言文法全国地図』第3集：部分）

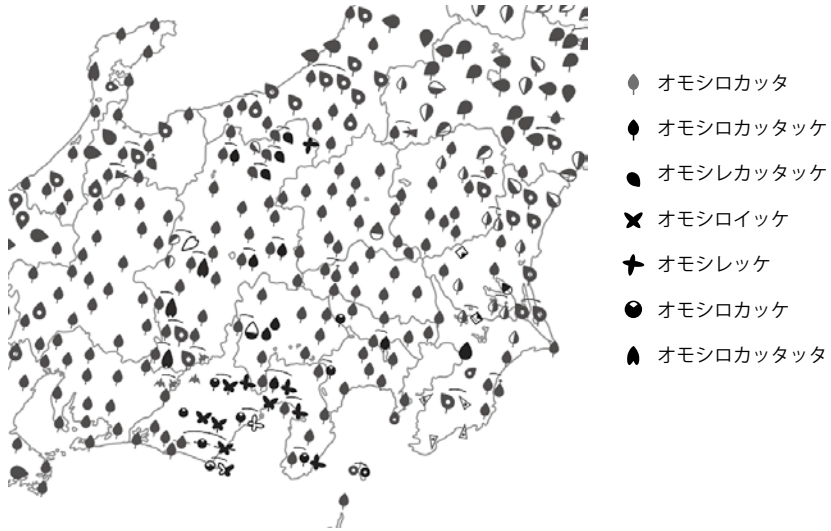


図7 「おもしろかったなあ」(国立国語研究所
1999『方言文法全国地図』第4集：部分)

6. 信州方言と静岡方言で異なる事象

上記のように、信州方言と静岡方言は共通する面も多々あるが、当然異なるところも多い。単語の分布は特にそうだが、それ以外で言えば、過去の表現に用いるケの使い方に差がある。図7は『方言文法全国地図』の「おもしろかったなあ」の地図である。関東地方や愛知県・岐阜県では共通語と同じオモシロカッタがほとんどであるが、静岡県と長野県・山梨県にはオモシロカッタツケやオモシロイツケなど、ケを含む言い方が見られる。共通語でも、「たっけ」や「だっけ」の形は用いられるが、「回想」や「関心を誘う意を込めての発問」に使われる(国立国語研究所1951)。調査における質問は「昔のことを思い出して、『あのときはおもしろかったなあ』と言うとき、『おもしろかったなあ』のところをどのように言いますか」というものなので、「回想」の意味合いを含んだ回答もある可能性はあるが、それでもケを含む回答が長野県東部と北部、それに静岡にまともっている。しかし、オモシロイツケやオモシロカッケという言い方は静岡県のみに見られる(一地点長野県北部にオモシレツケという地点があるが)。静岡では、単純な過去を表す場合、例えば、どこにあるかを自分が知っていることを他人に言う場合でも、アツツケという、さらには最近ではほとんど聞かれな

くなったがアツケのような表現もあった。また、ゴメンケやアリガトツケのように挨拶言葉の「ごめん」や「ありがとう」にもケを用いる。このように、ケの意味や用法の違いが信州と静岡にある。

この他、「出した」をダイタ、データのように言うサ行イ音便の現象は、長野県では西部の一部にのみ見られるが、静岡県では全県的に分布している。また、語的なものではあるが、単に「イモ」というと何イモを指すかということでも、長野県が県全域「じゃがいも」であるのに対し、静岡県は「里芋」ないし海沿いは「薩摩芋」であるという違いがある。ただし、静岡でも今後は若い世代を中心に「じゃがいも」になる可能性はある（木川2017）。これなどは、その地域での生産量、また食生活によって変わってくると考えられる。

7. ナヤシ共通語形の将来

現在全国的に共通語化・東京語化が進行している。信州・静岡においてもこの傾向は同様である。しかし、すぐさま共通語あるいは東京語に変わってしまうわけではない。また、地域によって、その変化のあり方も異なっていると考えられる。そこで、ここでは、静岡における変化の一つを見ることによって、今後の変化の方向を考えてみたい。

ここで取り上げるのは、5. でも取り上げた推量を表すラ・ズラについてである。大西拓一郎編『新日本言語地図』は、『日本言語地図』の調査から半世紀以上、『方言文法全国地図』の調査から30年以上経過した2010（平成22）年から2015（平成27）年、再び日本全国で言葉の分布を調査した結果をまとめたものである。また、これと同時期、筆者らは静岡県大井川流域において、言語地理学的調査を行った。これらによって、推量を表す言い方を見てみると、「行くだろう」のように動詞に推量の形がつく場合、信州方言・静岡方言更に山梨方言ではこの調査の時点でも、ラ・ズラ、長野県東北部ではダラズが用いられている。更に「先生だろう」のように名詞に推量の形がつく場合もズラ・ダラズが使われている。しかし、静岡県西部にはズラにかわって、愛知県に多く見られるダラが見られるようになっている。さらに、大井川流域の調査を見ると、ズラからダラへの変化が顕著である。図8は、大井川流域における1974（昭和49）年から1983（昭和58）年にかけての調査結果と、2012（平成24）年から2015（平成27）年にかけての調査の結果から、ダラと回答した地点だけを示したものである。

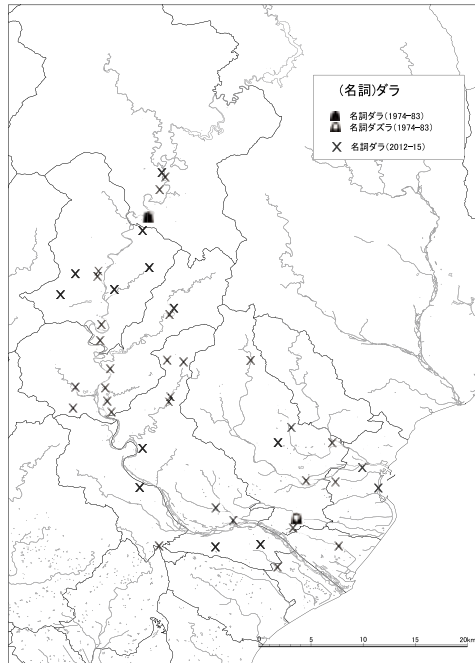


図8 大井川流域における「名詞+だらう」

図のように以前の調査では1地点のみにしか見られなかったダラが、今回の調査では上流から下流まで広く見られるようになっている（ただし、ズラとダラ両方回答した地点が多い）。これを愛知県など西の地域からの影響と考えるのが良いか、ズラのラは「だらう」を表わすが、ズが何か分からない、そこでズをダにかえたというような分析的な表現への変化と考えるのが良いか、おそらくは両者があいまったものではないかと思われるが、いずれにせよ、静岡県内ではズラからダラへの変化が急速に進んでいるようである。その一方、大井川流域の調査ではみられず、あまり勢力は強くなさそうであるが、静岡市内を中心とした地域では、名詞に直接ラがつく「先生ラ」のような言い方も見られる。これも、信州とは異なる変化と言えよう。いずれにせよ、推量を表す形式としてのラが、信州においても静岡県においても用いられ続けている点は注目して良からう。ただし、若年層の場合、行くッショのような、ッショが勢力を持ちつつある。ッショは、北海道方言とされることもあったが、現在では東京でも若年層を中心によく用いられている言い方であり、静岡県などの若年層が用いるッ

シヨは東京語化とも考えられる（東京よりも早く使われはじめた可能性もある）。

また、地図では示さないが、静岡では、過去を表す形としてのケは、現在でも、若年層を含め、よく使用されている。

「かたつむり」を表す語など、ものの名前を表す語をはじめとする名詞は、方言での言い方が急速に消えていき、共通語と同じ語を用いるようになってきている場合が多いが、上に述べたような文法に関わる言い方については、信州と静岡で異なる点はあるが、比較的残っているようである。今後もこの傾向が残っていくのか、あるいはこれらもやがて消えていくのか、消えていくとき、何からどのようにかわっていくのか、今後の動向を見つめていきたいと思う。

【参考文献】

- 大西拓一郎編 2016『新日本言語地図－分布図で見渡す方言の世界』朝倉書店
木川行央 2017「大井川流域における言語変化－30年前の調査結果との比較から」
大西拓一郎編『空間と時間の中の方言』朝倉書店
国立国語研究所 1951『現代語の助詞・助動詞：用法と実例』秀英出版
国立国語研究所 1966～1975『日本言語地図』1～6 大蔵省印刷局
国立国語研究所 1989～2006『方言文法全国地図』1～6 大蔵省印刷局
佐藤亮一監修 2002『お国ことばを知る方言の地図帳』小学館
静岡県方言研究会・静岡大学方言研究会編 1987『図説静岡県方言辞典』吉見書店
都竹通年雄 1949「日本語の方言区分けと新潟県方言」『季刊国語』6
東條操編 1954『日本方言学』吉川弘文館
徳川宗賢編 1979『日本の方言地図』中公新書
徳川宗賢 1981『日本語の世界 8 言葉・西東』中央公論社
中條修 1983「静岡県の方言」『講座方言学 6 中部地方の方言』国書刊行会
馬瀬良雄 1971『信州の方言』第一法規出版
馬瀬良雄 1983「信州の方言」『講座方言学 6 中部地方の方言』国書刊行会
馬瀬良雄 2010『長野県方言辞典』信濃毎日新聞社